

第 11 回(2003 年度)研究報告会雑感

平田 周

今年度の研究報告会には、14 の研究報告(特別・招待講演を除く)が行われ、盛況であった。報告会を聞いた一聴衆として思ったことを述べ、参加できなかった会員の方々に、状況をお伝えするとともに、今後の研究報告会で改められるべき点などについて、私見を述べたいと思う。それぞれ内容の高い研究が発表されたが、それらについて評価をするだけの見識はなく、あくまで雑感である。

なお、このような研究報告会は、関西など東京以外の地でも行われるべきかと思った。

情報知識学の研究領域の広さ

毎年のことであるが、情報知識学会が対象とする研究領域は広く、むしろあいまいであることから、報告される研究領域は多方面にわたっている。ディシプリンが不明確という問題はあるが、さまざまな学問が錯綜し、境界がはっきりしなくなっている今日の情勢からすれば、非難されることではないであろう。むしろどのようなテーマであってもあまり気兼ねなく報告ができるという点は、情報知識学会の特色として積極的に評価されるべきといえるであろう。「情報」という概念の広さ、それを複合語とする単語の多さからいえば、当然のことといえる。ただ、設立後 10 年以上を経た当学会の研究活動分野にも、ある種のコア・コンピテンスが必要だとも考えるのだが。

発表された 14 の研究報告を内容的に分類することは難しい。プログラムは、「情報学分野の実態調査」「情報・解析ツールの提供」「特許情報」「知識情報の構造解析」「科学技術データの解析」に分けている。きわめて大雑把に言えば、(1) 情報の具体的検索技術(7 編)、(2) データ・情報の構造解析(4 編)、(3) 情報の本質・利用に関するもの(3 編)ということになる。しかし、(1) と (2) とを区分する確たる線引きはできない。

このことからみれば、「存在する情報あるいは文献の中から、必要なものを選び出し、かつ理解や利用を容易にするための構造解析を研究する」ということが、現在の情報知識学会の主流をなすといえなくはない。その意味では、当学会の研究領域がきわめて多方面にわたっていると上記したが、これはあくまで観念的なこと、あるいは可能性ということになるのかもしれない。

情報処理学会と当会の差別化については、これまでも理事会などでしばしば論じられてきたが、コンピュータのハードウェアやソフトウェアを基点にして情報の解析を行うことを旨とする情報処理学会に対して、当学会のアプローチは、情報を基点にし、ソフトウェアは情報解析や利用のためのツールと考える立場であることが、報告された研究事例からもいえるように思われた。

より斬新な研究領域への挑戦

情報の検索や解析の価値を否定するものではない。ただ、これらがコンピュータ・サイエンスに含まれる、あるいは隣接するテーマであるのは事実であろう。世間で関心が高まっている「情報・知識」は、コンピュータやソフトウェアを利用した利便性の向上ではなく、情報や知識が社会に与えるインパクト、グローバル化や IT による情報伝達のスピード化が人々にもたらす影響、情報の活用といった問題でもある。メディアや教育、あるいは個人情報保護といった問題にも、研究が広げられるべきだろう。

研究報告あるいは論文であれば、数式が並び、統計的処理あるいは数量的な分析を行うものが内容的価値が高いものとして評価されやすい。しかし、情報知識学会の立場からすれば、理系的

なものと、文系的なものを兼ね備えた存在、より正確にはその二つを含み、かつ超越(止揚)したものであり、広い視野から問題をとらえる姿勢が望まれるのではないと思われる。もちろん、学術研究として、科学に立脚していることはもとよりではあるが、このことは、当学会が経営上、会員の増強を強いられていることと無関係ではない。広く会員を求めるには、研究テーマはより多岐にわたり、ビジネスという局面における情報や知識の問題を軽視することは避けられなければならない。

これは、冒頭に述べた「当学会にコア・コンピテンスが必要だ」としたことと矛盾すると思われるかもしれない。しかし、研究の範囲が拡大すればするほど求心的な力が必要となる。当学会としての、ディシプリンあるいはフィロソフィなしには、多様な研究をまとめることができない。

プレゼンテーションで気になったこと

OHPからはじまって、現在ではほとんどがパソコンを使つてのプレゼンテーションへと変わってきている。上手にレイアウトされた投影画面が、聴く者に理解しやすくしているのは間違いない。しかし、気になったのは、報告者の多くが、聴衆の顔を見て話をしないことだった。スクリーンに対して、45度の向きに立ち、画面と聴衆とを同時に見ながら説明するのが望ましいが、スクリーンに向かって話し、聴衆に背を向けたまの姿勢で説明する人がいた。また、パソコンの操作と説明を一人でを行うため、パソコンの画面を覗き込んだまま、まったく顔を上げることなく説明する報告者もあった。

説明のわかりやすさは、画面のレイアウトではなく、聴いている人たちの表情を見ながら、どうすれば興味を引き、理解しやすいかを考えながら話すことにある。近年、プレゼンテーションのツールが発達するにつれ、聴衆に訴える話者の姿勢が失われていくのは残念である。

研究には、熟達の研究者がアドバイス、あるいは共同研究者として名を連ねているケースが多い。報告者に、研究内容だけでなく、効果的なプレゼンテーション技術の指導もなされるべきであろうと感じた。

研究報告を聞く聴衆にとり、個々の研究は専門領域外のものがほとんどである。それだけに理解しにくい。朝9時から夕方まで、緊張を維持してすべての報告を聞くことには、相当の忍耐力がいる。

門外漢に興味を持たせるには、その研究課題が研究として必要である背景、それが解決されることによる関係方面に与える効果や恩恵、そして用いた研究手法のユニークさについて、冒頭にわかりやすく少し時間をとって説明することであろう。その分野に携わっている人たちには、当然と思われる研究課題が、なぜ重要なのかは、そうでない人には理解できないことが多い。

進行を図る司会者が苦勞していたのが、報告者が定められた発表時間を守らないことだった。そのため、プログラムのすべてが終わったのは、終了予定時間を40分以上過ぎていた。合図のベルが鳴っても、一所懸命の報告者の耳には届かないとか、とにかくすべてを話し終わらねばという必死の気持ちもあるのだろうが、プログラム全体の進行に迷惑をかけてはいけない。

報告時間がオーバーするのは、投影するスライドの数が多すぎることで、前述したように聴衆の顔を見ながら説明しないことに原因があると思われる。聴衆の表情を見て、興味の反応を確かめながらメリハリのきいた説明をすれば、制限時間を超すことはない。説明不足は、質疑応答で補うことも可能である。

来年度は、報告者に事前に「発表のマニュアル」のようなものを渡し、気持ちのよい、わかりやすい報告が聴けるよう配慮して欲しいものである。

平田 周 立正大学大学院経営研究科